



KARIBIB の回想



2023 年度 1 次隊/数学教育/渡辺 崇人

2025 年 9 月 23 日 Vol. 39 (最終号)

Thank you

いよいよこの通信の最終号です。今回は、活動以外のことも含めたナミビア生活の総括と 2 年を経て変わった価値観、日本に帰国して改めて感じた日本のすごさをまとめます。

ナミビア生活の総括

約 2 年間のナミビアでの生活ですが、要約すると
周りの人に恵まれた

この一言に尽きます。派遣前から応援いただいた方々や派遣中も日本から連絡をくださった方々に加え、[Vol.38](#) に記載の通り、活動では同僚・生徒に恵まれ、私生活でも日本で教員をしているだけではきっと出会えなかった方々と巡り合うことができました。そこで同ったこれまでの歩みや失敗談は、今後の人生を考える上で大きな糧となりました。また日常のほんの一角でも、料理を教わった上に振舞っていただいたり、髪を切っていただいたりと挙げるとキリがありませんが、資源・選択肢が限られていた中だからこそ、日本にいと当たり前だったことでもそのありがたみを再認識できました。思い返すと、自分が何かしたことよりも、やってもらったことばかりが浮かんでくるような、周囲の優しさに何度も助けられた 2 年間でした。

2 年を経て変わった価値観

大きく、4 つあります。

① 「仕事」に対する考え方

日本で働いていた頃は職種の影響も大きいですが、土日でも休んだ記憶がほとんどなく、生活の中心は仕事一色でした。食事すら面倒に感じ、2 日ほど抜くこともザラにありました。一方でナミビアの同僚達は、ほとんど全員が仕事よりもプライベートを大切にします。着任当初こそ「なぜ、もっと仕事に責任をもたないんだ？」と受け入れ難い考え方でしたが、2 年近く傍にいるうちに、こちらの方が異常なのではないかと今までの考え方を懐疑的に見つめるようになりました。もちろん日本での働き方も一概に悪いとは言いません。効率化の工夫やアイデアの実現のために試行錯誤する中で、結果として専門分野以外の知識、スキル、能力を身に付けられたことも事実だからです。しかし、今際の際に生涯を振り返った際に「本当にこれだけでよかったのだろうか？」と考えそうだなと思う気持ちは、派遣前以上に強くなりました。「ワークライフバランス」。簡単には実現できないものですが、意識しておくだけでもその後が少し違ってくるのかなと思うようになりました。

② 「なんとかなる」という精神

こちらでは、仕事でも旅行でも、事前に計画を立てていても何かしら想定外のことが起こり、すべてが計画通りという事の方が珍しかったです。ただ、いずれも最後はなんとかなりました。そのため、準備を一通りしておけば、途中アクシデントがあっても最後は「なんとかなる」だろうと楽観的に物事を捉えられるようになったと思います。

③ 「外国人」へ話しかけるハードル

日本にいれば当然、日本人に囲まれて生活することが多いです。しかし、海外で“マイノリティ”として生きるという生活を経験して、今まで気付かなかった日本在住の「外国人」が抱えているであろう苦労や苦悩が見えるようになりました。またその分、何に困っていそうか想像できるようになり、そういった方々へ声をかけるハードルが派遣前よりもぐんと下がりました。以前は“これで通じるだろうか？”等、明らかに困っているのに声をかけようか迷う時間がありましたが、帰国後は②の通り、最悪通じなくてもなんとかなるという根拠のない自信があるせいか、例えば年配の方の荷物を持ちたり、階段の上り下りで手を貸したりといったすぐにできそうなことは躊躇わずにできるようになりました。今度はこれが巡り巡って、その人と関わった日本人にこの恩が渡ると嬉しいです。

④ 死生観

日本で放送されているウクライナやガザ地区での出来事、その他国際情勢には今まで以上に耳を傾けるようになり、同時に“生まれた場所が違うだけで、こんなにも一般人が巻き込まれなければならないのか”と深く考えるようになりました。そして悲しい話ですが、ここナミビアでも、日本より「死」というものを身近に感じる出来事を多く経験しました。よく知っている生徒が急に行方不明になったり、昨日まで笑いながら話していた生徒が強盗に刃物で刺されて亡くなったりといった事件です。その都度、「命ってこんなに軽いものか？」と考えさせられました。だから、思い描いた明日が来るか不確かな環境下にいる人たちに接するからこそ、惰性で仕事をこなすことは辞めようと思うようになりました。やる時とやらない時でメリハリはつけますが、やる時は“今日が人生最期の日だったら、どう動く？”というくらい今まで以上に意識して動くようになりました。

日本に帰国して改めて感じる日本のすごさ

最後に、帰国して改めて感じた日本のすごさについてです。ほとんどの人が口を揃える食事のレパトリーの多さやインフラの整備度合いは言わずもがなです。特に公共トイレの綺麗さ、おまけにウォシュレットが使えるのは水が綺麗な国ならではのでしょう。浄水技術の凄さが分かります。ただ、帰国直後に特に凄さを感じたことが3つあります。

1つ目は、治安の良さです。特に夜中に当たり前のように店が開いており、外を歩けると

ということには新鮮さすら感じました。ナミビアでは治安上の理由から、JICA 関係者の夜間の徒歩移動が禁じられています。何なら昼間ですら徒歩移動できない都市もあります。ただこれは、当国に限らず多くのアフリカの国は似たような状況だと思います。そういった環境で暮らしてみると、日本で取れる選択肢の多さには感動を隠せません。警察もそうです。例えばある国では、州の警察官と町の警察官では採用基準が異なり、後者は比較的緩い上に給料も高くないため、お金のために町の犯罪組織に買収されてしまい、結果として犯罪が見て見ぬふりをされたり、善良な市民・観光客が助けを求めても相手にされないどころか却っていちゃもんを付けられ、金銭を巻き上げられたりするといったことを耳にします。それを考えると、日本の警察に不満がある人も一定数いるでしょうが、彼らがいてこそ現在の治安が保たれているのかなとも思います。

2 つ目は、性善説で成り立つ商売・行動です。例えば最近は減ってきているものの、無人販売所はその最たる例だと思います。目にするといつも“日本ってすごいよな、ほとんどの国だと成り立たない商売モデルだよな”と思ってしまいます。他では場所取りのためにバックやスマホ等私物を置いていくこと。これも日本だからできることなのではないでしょうか？ただ、同じ日本人ながらこの感覚のままで大丈夫かなと心配にもなります。学校だと、下駄箱がそうです。「何が？」と思う人もいるでしょうが、日本では玄関で靴を履き替える習慣がありますね。そのため室内用の靴・スリッパは下駄箱に“無施錠で”入れておきますがこの話をした所、あるナミビアの生徒が「え、盗まれないの。(。´・ω・)?」と尋ねてきました。確かに、今まで日常的すぎてあまり気にも留めませんでした。が、生きるためにお金になりそうな物は何でもくすねる人たちが当たり前にいる環境下では、至極もっともな疑問だと思いました。同時にこれが通常運転の日本人の方が世界的には異様なのかもしれないとすら感じました。

最後が社会制度等、見えない部分です。例えば国民皆保険制度や国民年金・厚生年金、高額療養費制度、生活保護、雇用保険、介護保険等、その種類は世界でも豊富な方でしょう。また、だからこそ犯罪組織に買収されるよりも、真っ当に生きた方が恩恵があり、上述したような治安の良さにも関わってくるのかなと思います。

場面は変わり、街並みを見ても、外観を綺麗に整えるために地域毎に建物の高さや容積率、営業できるお店の種類や規模に規制がかかっていたり、道路の中心から敷地の境界までの距離が一律に定まっていたり、隣地が影に入らないように建物の上部が斜めにカットされていたり、緊急車両が通行できるようにほとんどの道幅が 4m 以上で設けられていたり、何も考えなければ何一つ疑問にすら感じませんが、街を歩くだけでも、こんなにも細かい所まで配慮があるのかと色々な発見があります。これら制度や配慮は、全員が全員を救済できる完璧なものではありませんが、自分たちが知らないだけで、なるべく多くの人を支援し、生活を豊かにしようとしてくれており、勉強するだけたくさん発見できます。税金の使い道に納得がいけないこともあります。先人たちが築き上げてきた自分たちを支えてくれるモノ・コトにより興味が湧きました。知ろうとすればするほど難しいことが分かりましたが、色々な分野についてもっと知りたいと思えるようになりました。

というように、この2年間は生涯忘れることのない人たちと出会えた一方で、紛争がある地域や日本国内の政治的課題についての考え、現行制度の恩恵、また身の回りのことや今後の人生に関する自身の核を形成する領域の考え方について改めて見つめ直せた貴重な期間となりました。ここで得た知見を社会還元できるよう、日本でも思い付いたことに挑戦しようと思います。

読者の皆さまへ

この通信を始めた当初は、毎月一号投稿し、全体で Vol.20 まで行けば御の字だと思っていた。またお気づきの通り、一号、一号の文字数が多いため、一つを作成するのにレイアウト構成や写真選定まで入れると多くの時間と手間がかかり、面倒だと感じることも正直ありました。しかし、派遣前に応援してくれた日本の方々にナミビアの生活の様子を届けられればいいかと思って始めたものでしたが、それ以外でも、自分の文章を見せることが恥ずかしかったため黙っていたものの、ネットで見つけてはリンクを笑いながら送ってきた卒業生たち（さすが、在学中からスナイパーと呼んでいただけてはありますね、、、）、ナミビアやカリビブまで来てくれようとした同期（都合でお会いできなかった方、申し訳ございません）、地元の行きつけの店のオーナー、交流事業や講演会で接点ができた高校生や先生方、これを見て JICA に応募したという方など目を通してくださっている方が一定数いることが分かり、また感想をよこして下さったことが今日までモチベーションを維持できた大きな要因になります。文章が長く、読むのに体力が要るものが少なくなかったと思いますが、ここまで読んでいただき、本当にありがとうございました。ネットに載っていないナミビア、ひいてはカリビブのことを知っていただけたら幸いです。

また、もしこれを機に国際協力に興味を湧いたという方や人生がくすぶっていると少しでも感じる方は、お近くで行われている関連するイベントや行事にふらっと立ち寄ってみてください。そのちょっとした行動があなたの今後を大きく変えてくれるきっかけになるかもしれません。

AFRICAN SAFARI

Vol.10

最後は、初めて目にした時にその美しさに心を奪われた鳥をご紹介します。

《ライラックニシブッポソウ》

翼や腹が鮮やかな青や緑、胸元がライラック色をしたアフリカ南部～東部に生息している鳥です。平和、繁栄、幸福の象徴としてケニアやボツワナの国鳥に指定されており、滅多に目にかかれない程珍しい鳥という訳ではありませんが、「最も写真映える鳥」と言われることから、ガイドブックでは「ラッキーバード」として紹介されることもあります。

英名は *Lilac-breasted Roller*。意味は“薄紫の胸をもつ、くるくる回るように飛行する鳥”です。求愛行動や縄張りアピールの時に空中でくると宙返り（ローリング）する飛び方が由来になっています。一方、日本名がブッポウソウとなっているのは鳴き声が

「仏・法・僧」と聞こえるからだそうです。国によって捉え方が全く異なるのは、面白いですね。いずれにせよ、久しぶりに宙返りしようとして奇跡的に捻挫で済んだ僕とは違い、優秀な鳥です。

